

## 特集「日本の恐竜学最前線」

平山 廉\*

本特集は、2007年11月11日に東京都新宿区の早稲田大学で行われた第128回化石研究会例会のシンポジウム「日本の恐竜学最前線」の内容をまとめたものである。このシンポジウムでは、4編の講演が行われた。その発表内容は、化石研究会誌40巻第2号に「講演抄録」として掲載されているので参照していただきたい。

恐竜に対する世間一般からの関心の高さは今更言うまでもないことであり、昨年おこなわれたシンポジウムでも記録的な人数の参加者が集まったことにもよく象徴されている。恐竜研究の世界的な中心が、保存良好な化石を多産するフィールドに恵まれた北米や中国であるのは当然である。だが、海外留学や海外での発掘調査を通じて優れた研究成果を挙げた日本人研究者も、近年は珍しくなくなった。さらに海外の研究者から注目されるほど資料価値の高い恐竜化石の国内における発見も相次ぐようになった。本特集号を通じて、日本における恐竜研究の現状と今後のボンシヤルを類推していただければ幸いである。

今回の特集には、4題の講演の内容が論文として掲載されている。これらの論文の内容は、シンポジウムでの発表内容にその後の研究成果が付加されたものもある一方、以前に掲載された内容との重複を避けるために、発表内容の一部を割愛したものもある。

各論文のタイトルと概要は、以下の通りである。

三枝春生・田中里志・池田忠広・松原尚志・古谷裕・半田久美子「下部白亜系篠山層群からの竜脚類およびその他脊椎動物化石の産出」

：2006年8月に兵庫県丹波市の篠山層群より発見され、2007年2月から2008年3月にかけて発掘された脊

椎動物化石について、現在判明していることについて述べる。ほぼ関節状態の竜脚類の脊椎骨や肋骨、脳函、獣脚類および鳥脚類の脱落歯などが確認されている。このほか、恐竜以外の小型四足動物も発見されているが、まだ詳細は不明である。

平山 廉「巨大恐竜・竜脚類の古生態を類推する」

：史上最大の陸生動物でもある竜脚類の古生態については、まだ多くの未解明の研究課題が残されている。特に、足跡から推定される重心の位置は、竜脚類のボディプランが他のいかなる四足動物とも異なる特殊なものであったことを示唆している。竜脚類の研究は、古生物の生態復元にあたって、安易に現生動物のモデルを当てはめるべきでないという好例なのかも知れない。

鈴木 茂「林原-モンゴル共同調査の15年と問題点」：林原自然科学博物館とモンゴル科学アカデミー古生物研究センターとの古生物学共同調査はゴビ砂漠の白亜系を中心に1993年から継続しておこなわれてきた。本論では2004年以降に行われた共同調査の内容と成果を紹介する。

小林快次「Review of the phylogenetic position of ornithomimosauria in Coelurosauria with comments on the relationships of ornithomimosaur and alvarezsaurids」

：外見がダチョウに似ており、恐竜の中で最も走るのが速かったと考えられているオルニトミムス類。白亜紀に繁栄した恐竜で、その骨格化石がアジアと北米から多数発見されている。世界各地から発見されているオルニトミムス類の紹介を通して、この恐竜の進化過程と生活様式について述べる。

\*〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-7-14 早稲田大学国際教養学部

E-mail: renhirayama@waseda.jp